

平成二十七年 春

あな憎し 憎し憎しに 明日はなし (1Sによる日本人捕虜斬首)

それぞれに 命の重さ 違うかと 我が身に問えば 如何に答えん

赤き月 水面を燃やし 何語らん

白梅の 丸きつばみの 愛らしさ 春の便りよ 胸に届かん

春よ来い 水面を渡る 朝もやに うららにかすむ 岸辺の木陰

新緑が 茜に染まる 西の空

紫陽花の 移りし色に 時重ね 今と昔を 行きつ戻りつ

白き鷺 沈む夕日に 際立てり

平成二十七年 夏

雲分けて 上弦覗き 恥じる水無月

こつへ

雨上がり 頭たれたる 紫陽花に ご苦勞さまの ねぎらい返す

それぞれに 命燃やして 競いあう 風月花鳥に 季節移ろう

はんげしやう

雨後の朝 山並み映えて 半夏生

かえ

街灯の 光を反し 装いて 螢とまがう 景宿の露

虫の音は 秋の気色と 限らぬと 夜風を友に 暑さ包まん

暑苦し 潮の目変わる 様のように 冷氣舞い降り 景色波立つ

雨音に 一節雜じる 蟬の声

平成二十七年 秋

秋雨去り 重き空気に 朧月 ベールをまとい 妖とたたずむ (久々に詠む)

まだ三月 もうはや三月 悲しみを 積んで白く 季節移ろう

名月と 月命日を 供養せし

雲あれど いとわず射抜く 月冴えて

惜別も 今はもう秋 高き空 (納骨式を終え)

秋深けて か細き虫の音 涼にしむ

落ち景踏む 軽きリズムの 千鳥足

平成二十七年 冬

眼を病んで 氣力影さす 年の暮れ (黄斑変性症)
初霜に 足跡残し 弾む息

聖夜晴れ 水面キラキラ 満月の 恵み嬉しや やほルミナリエ (満月の聖夜)
子や孫ら 別れの名残り 置き土産

初夢や 我の背を押す 応援歌
小雪舞う カラス二声 寒に吐く

盃重ね 明日が^{あす}つながる 生きる術
巡りくる 春の温もり 待ちわびる
灰色が 寂しさ足して 冬模様

空の青 池に映して 春まじか 朝のジョギング 汗ばむ陽気
姉妹逝き 共に集いて 昔日の 一家団樂 黄泉に戻りぬ (2月23日昌子叔母逝去)

平成二十八年 春

陽光の うれしき頃に 年重ね 縁の糸に 想いを辿る (67才の誕生日に)
^{えにし}

春色に 光弾ける 彼岸かな (墓参りで)

花さくら 青き鶯 草団子 (目に青葉 山ほととぎす 初がつお) にならつて)
混沌の この世に生きる 我あらん

岸見えぬ 浮世にありて 愛おしく 暗天に淡く 桜・星降る
風に舞い 水面に浮かぶ 花便り たゆまぬ季節の 証を届け
^{とき} ^{あかし}

人知れず 季節の流れを 伝え継ぐ 花散り初めて はや葉桜に
^{とき}

故郷に 訪ね来てみて 春最中 想い出語りて 供養となさん (穴吹にて叔母納骨)
^{まなか}

幼な孫の 弾ける笑顔に 目じり下がりぬ
大地揺れ 人の小ささ 思い知る 葉桜悲し 彼の地に添えば (熊本大地震)

枝揺らす 風舞い降りて はらはらと 月影動き 静けさ乱る
風風いで 都会の周に 星わずか こもる寂しさ いつかしのびよる
舞い集い 白雪装う 綿毛かな

朝もやに グラデーシヨンの 山並みよ
生かされて 生きてこそ聞く 梅雨便り
入梅に 木星・火星 土星咲く
入梅や 重き空気が 腑に落ちる 酔いのひも解く 歳時記とてなし
梅雨晴れて 孔雀に見紛う 雲まぶし

平成二十八年 夏

生かされて 生きて今年の 夏至はきぬ
それぞれの 夕餉のにおい 裏通り
昇りきて 雲のあいまに かくれんば 重き梅雨空 軽き月光

夏がきて 想いたどれば 母こいし

命日を 明日に控えて 墓清め 夏草のにおい 両手に包む
親鸞の 供養にあずかり 厳かに 広きお堂に ご先祖偲ぶ (御速夜法要)

夏の京 汗をにじませ お念仏 (東本願寺で本山申教)
焼香の 煙に託す 彼岸への 便りに込めし 安き眠りを

今日の 供養の在りか 心中と 繰り返せども 消えぬ寂しさ (妻と二人の一回忌)